

---

## 2 . 敬

森瀬ユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2．敬

### 【Nコード】

N5017P

### 【作者名】

森瀬ユウ

### 【あらすじ】

剣道部・佐藤悠基視点

まさか武道館の鍵すら開いていないとは思わなかった。

悠基は腹立たしさよりも純粋な驚きを感じながら職員室に向かっていた。確かに朝は早いですが、決して自分以外に誰もいないというような状況でもない。事実、野球部はすでにグラウンドで朝の練習を始めている。部員たちのランニングの掛け声が耳に届いた。何事も初めが肝心とばかりに新入部員を鍛え上げているのかもしれない。

東の空を太陽が照らしている。透明な青にはそこらじゅうに雲が浮かんで太陽の光を歪ませていた。五月晴れとはいいたい。しかし晴天とは空に占める雲の割合が8割以下の状態のことを言うそう。ならば今日は晴れと言っても差し支えはないのだろう。晴れた空はそれだけで人の心を明るくさせるが、1人だとも調子が出ない。

（今まではこんなことなかったのになあ）

悠基はぼんやりと思った。

今まではこんな風に教わった知識を反芻してみることなんてなかった。今までは活動場所の鍵が開いていないなんてことはなかった。今までは、

（……らしくねえな）

そこまで考えて、悠基は自分の思考を締め出すかのように首を振った。そして左腕に預けた竹刀袋を握り直して歩調を速めた。

職員室は管理棟の2階に位置している。何となく緩んでしまったしまった気持ちを払拭するかのように力を入れると、職員室の扉は思いの外大きな音を立てて開いた。

「失礼しまーす」

悠基は失礼とも何とも思っていない口調で言いながら職員室に入った。早朝の職員室は閑散としていて、出勤してきている教員のほうが少ないくらいであった。幸いなことに口うるさい生徒指導担当

の教員はまだ来ていないようだった。ほっと胸を撫で下ろす。

きよろきよろと職員室の中を伺うと、デスクに座って珈琲を飲んでいた教員と目が合った。直接教わってはいないが、彼は確か体育の教員だったはずだ。

都合がいい。悠基は挨拶をしながらその教員のところへと急いだ。

「おはよう御座います」

「おはよう。どうした？」

教員は手にしていた珈琲をデスクの上に置き、近づいてきた悠基のほうへ身体ごと向きを変えて応えた。

（感じのいい先生だな）

その対応に悠基は思う。

「部活の朝練があるんで武道館の鍵を借りたいんですけど」

「武道館？ えーと、お前は……」

悠基が用件を告げると、教員は何かを思い出そうとするかのように言葉を濁して眉を顰めた。恐らく悠基の名前を思い出そうとしているのだろう。

「佐藤です」

「佐藤か。悪いな、まだ新入生の名前と顔が一致してないんだ。佐藤は剣道部か？」

教員は言いながら申し訳なさそうな顔をしたが、悠基は全く気に留めない。悠基がこの教員と言葉を交わすのは今日が初めてであり、彼が悠基の名前を知っているはずがないからだ。

「はい、剣道部です」

「だよな」

少しでも知識があれば、悠基の持っているものが剣道に使う竹刀袋であるということはすぐに分かる。

「ちよつと待っててな」

そう言っただけで教員は椅子から立ち上がり、学校中の鍵を保管しているキーケースへと向かった。キーケースは職員室の壁に取り付けられているが、ケース自体にも鍵が付いており、その鍵を各教員が保

持して共同管理するというシステムになっていた。

早足で戻ってくると、教員は悠基に鍵を2つ手渡した。

「これが武道館の鍵。で、これが剣道場の鍵。部活が終わった後に俺がいなくても、誰か他の先生に言って返してくれればいいから」  
そして丁寧に説明してくれる。

「分かりました。ありがとうございます」

悠基は受け取った鍵をポケットに仕舞い込んで軽く礼をした。言葉だけでなく一緒に身体も動いてしまうのは、長年の習慣からだろうか。いい習慣ではあるが、大抵の人はその行動と悠基の外見とのギャップに驚かされる。

職員室を出ようと悠基が足を進め始めると、何かを思い出したかのように教員がその背中に声を掛けてきた。

「そうだ、佐藤」

「なんですか」

足を止め振り向くと、教員は自分の耳を指差して言った。

「勿体ないから、剣道する時は外せよ」

その口元は笑みを形作っていた。

悠基は驚いて一瞬言葉に詰まってしまったが、しかしすぐにその言葉の意図に思い至って、同じように笑って答えた。

「言われなくても、外してますよ」

悠基の耳に付けられた複数のピアス。それに加えて明らかに染めたと分かる茶の髪。どんなにしっかりとした考えや信念を持っていたとしても、人の印象は殆どがその外見で決まってしまうという。悠基のその外見は、不真面目や不良、はみ出し者などといった不名誉なレッテルを貼られるのには充分なものであった。しかしこの教員は、今日初めて触れた悠基という生徒の態度から、そうではない何かを感じ取ったようだった。

（みんながこの人みたいな先生ならばいいのに）

ピアスを取れ、髪を染め直せ。そう頭ごなしに叱りつけてくる生徒指導教員の顔が思い浮かんだ。なんという間抜けな面だろう。悠

基はくすりと笑った。

「ありがとうございます」

そしてもう一度お礼の言葉を言って、職員室を後にした。面倒くさい教員には会いたくない。軽くなった心を抱いたまま、悠基は階段を駆け下りた。

管理棟から外に出ると、雲を通り抜けた太陽の光が瞳に刺さった。眩しい。けれどもそれも不快ではない。

ポケットの中で2つの鍵がカチャカチャと音を立てている。その音が悠基の気分を高揚したものへと変えていく。

（よし、やろう）

心の中で気合を入れ直し、悠基は軽い足取りで武道館へと向かった。

朝の部活を終えて教室に行くと、もう殆どのクラスメイトが登校してきていた。それもそうだろう。朝のホームルームが始まるまで後10分しかないのだ。ホームルームが始まった時点で教室にいないければ、その人は遅刻という扱いになってしまう。部活をするため学校にはいるのに、教室に来ていないというだけで遅刻扱いになってしまうのは何だか腑に落ちない。だから悠基は遅刻をしても気にしないし反省もしないことにしていた。

「おっはよー」

持ち前の明るさと共に教室内を進むと、それに応えて多くの声が返ってきた。悠基はその一言一言にきちんと言葉を返している。その律儀さとノリの良さが幸いしてか、すでに悠基はこのクラスの中心人物の1人となっていた。周りには常に誰かが一緒にいて、教室で独りでいるところを殆ど見たことがないと言っても過言ではなかった。

指定された悠基の席の後ろでは友人の一彦が数学の問題集とノートと対峙していた。朝の喧噪に包まれる教室の中で彼1人が静寂を

保っている。

「ヒコ、おはよー」

机の上に荷物を置きながら声を掛けると、一彦はシャープペンシルを握る手を止めて顔を上げた。朝から何だか疲れたような表情をしている。悠基は一彦に向けて笑いかけた。

「おはよう」

すると一彦も笑みを作った。悠基はその笑顔にほっとする。彼は一人でいると常に難しい顔をしている。だからいつも一緒にいてこうして笑っていて欲しいと思ってしまう。

「1限目って数学だっけ？」

一彦の手元を覗きながら悠基は尋ねた。ノートには彼の小さく丁寧な字でびっしりと数式が書き込まれている。

「いや、国語。これは明後日に提出する宿題だよ」

そう言って一彦は問題集とノートをぱたりと閉じた。悠基を邪魔と思ったのか、それとも悠基との会話を優先させるためなのかは分からないが、今はもうこれ以上問題を解くつもりはないらしい。

「宿題なんか出てたか？」

「……お前なあ」

驚いた口調で悠基が尋ねると、一彦は心底呆れた声で呟いた。怒りすらもう超えてしまっているらしい。

「授業中にちゃんと先生が言ってたぞ」

「そうだった？」

「そうだよ」

うーん、と、悠基は記憶の糸を辿る。しかしすぐに諦めてその作業を放棄した。覚えていようがまいが、宿題をやっていないという事実に変わりはないのだ。

「ま、いいや。範囲教えてよ」

悠基はカバンの中から自分の問題集を取り出しながら尋ねる。同時に一彦の机の上に置かれていたシャープペンシルを手に取った。しかし彼は嫌な顔ひとつしない。

「32ページの第2章から……」

一彦は自ら悠基の問題集のページを捲り、宿題の範囲を教えてくれた。その細い指が示すページに悠基は直接メモを書き込んでいく。一彦が示す宿題の範囲は思ったより広く、問題数も多かった。メモを取りながら悠基はうんざりとした気分になった。終わる気などこれっぽっちもなかった。しかしどういいうわけか手を付けることもなく放り投げる気にもなれなかった。

喧騒の中、1人で課題に取り組む一彦の姿が脳裏に浮かんだ。

一彦の言葉を聞きながら、悠基はその細い指の動きに見入った。ゆるやかな思考が頭の中を満たしていく。それは今朝悠基の身体を巡った靄にも姿が似ていた。正体は分からない。それでも原因は心の何処かが知っているような気がした。動かなくなったシャープペンシルに気付いた一彦が眉を顰めて顔を上げた。

その瞬間。

「なあなあ、鈴木。そのノート貸してくれよ」  
声が聞こえた。

悠基と一彦が声のしたほうへと顔を向けたのはほぼ同時のことだった。そこにはクラスメイトが2人、机3つ分ほど離れた場所に立っていた。視線は一彦の机の上、問題を解いたノートへと注がれている。悠基も一彦も彼らと交流が一切ないわけではない。しかし決して仲がいいと言える間柄でもなかった。今この瞬間の微妙な距離感が、そんな彼らとの関係を如実に表しているように思えてならなかった。

「……ノート？」

感情の籠らない声で一彦が尋ねた。それと同時に、悠基の中にふつふつとした怒りが湧き上がってくる。

「俺らも佐藤と一緒に全然宿題やってねえんだよ。終わったらでいいからさあ、頼むよー」

彼らの一彦を小馬鹿にしたような言葉が更にその感情を助長した。



(何を言っているんだ、こいつらは)

悠基は左手で頬杖をつき、上目遣いでクラスメイトたちを睨んだ。そして低い声で言い放つ。

「駄目」

一彦の返事を期待していたクラスメイトたちは、思いがけない悠基の言葉に目を丸くした。そして明らかに不機嫌な形相になっている悠基にたじろいだ。笑うとやわらかな印象になる悠基であったが、笑みを収めるとその様子は一気に変わってしまう。吊り上がった目が浮ついたクラスメイトたちの心を鋭く射抜いた。普段はあまり見せることのない悠基の姿に、彼らはその場に凍りつく。唯一、一彦だけが安堵のような表情を浮かべていた。

「な、何でお前が怒るんだよ佐藤おー」

乾いた笑みを顔に貼り付けながら1人が言った。そして、なあ、ともう片方のクラスメイトと目を見合わせる。なんとかこの場の雰囲気明るく自分たちの都合のいい方向へと持っていこうとしているのが手に取るかのように分かった。

(ふざけんじゃねえぞ)

悠基は思う。

彼らは今、一彦の努力を横から掠め取るうとしている。そのことが悠基を堪らなく不快にさせていた。何故、正直者が馬鹿を見なければならぬのか。悠基は自分が不真面目で軽い性格であることを自覚している。やる気になれないのだから仕方がない、興味が持てないのだから仕方がない、そう思っている。だからその結果を自分で受けるのは当たり前だとも思っている。今回の宿題にしてもそうだ。やらなかったらやらなかっただけの罰を自分が受ける、その覚悟を悠基は持っていた。それが嫌ならば自分の力でやればいい。誰かを踏み台にして自分を取り繕うことだけはしたくなかった。

悠基は鋭い目つきを収めることなく、低い声で吐き捨てた。

「俺も自分でやるんだ、お前等も自分でやれよ」

その言葉に、クラスメイトの2人は色を失った。普段の明るくノ

りのいい様子ばかりを見てきた彼らには想像もつかない悠基の姿。これ以上下手なことを言うのはやめよう、そう彼らに思わせるには充分だった。

「じゃ、じゃあ、そうするわ。悪かったな、鈴木」

そそくさと遠ざかる背中をもう一度睨みつけて、悠基はその目を細めた。そして視線を床に落として自分の中の嵐が去るのを待つ。

(……本当にどうしようもない)

心の中で呟く。

くだらないクラスメイトたちとのやりとりも、感情に支配されやすい自分自身も。本当に、どうしようもない。

楽しいなら楽しい。ム力つく時はム力つく。精神の針は常に何処かで振り切れていて、悠基の言動はそこに直結していた。自由気ままに奔放、肯定的に捉えてしまえばそうなるが、それは自身の感情をコントロール出来ていないのと同然だった。

(嵐を、飼っているんだ)

なんとか教室では負の方向に針が傾くのを抑えていたけれど、彼らはもう今まで通り笑って話し掛けてくることはないのだろう。つい先ほどのクラスメイトたちの怯えたような表情を思い出しながら悠基は思った。それも仕方がないこと、だ。

目を瞑って感情を抑え込む。

しかし一彦の言葉がその嵐をいとも簡単に追い払ってしまった。

「直前になって見せろって言われても、お前には見せないから」

一瞬悠基は何のことだか分からなかった。閉じていた瞼を開けて、一彦の顔を見てようやく、その言葉が例のノートを指しているのだということに思い至った。

ふっ、と心が軽くなる。針が、揺れ動く。

「その時はおとなしく怒られるから、別にいいよ」

悠基の顔は自然と笑顔を形作った。その言葉を聞いてようやく一彦の表情にも小さな笑みが浮かんだ。それを見て、悠基の中には先ほどとは正反対の感情が生まれてくる。

言葉通り、どんなに悠基が頼み込んでも一彦は宿題をやったノートを見せてはくれないだろう。そして他のクラスメイトが頼んだならば簡単にその頼みに応えるに違いない。けれども悠基はそんな彼を薄情だとは思わない。むしろ手を貸されたほうが失望してしまうだろう。悠基への対応と他のクラスメイトたちへの対応の、どちらがより「やさしい」かという点、それは前者だと悠基は思っている。安易に手を貸すことが、その人の成長の機会を奪ってしまうこともあるのだ。見掛けだけのやさしさなど誰にでも与えられる。厳しくすることのほうがよっぽど難しい。

へへへ、と。人懐っこい笑顔を浮かべて悠基は笑う。対する一彦は眉を寄せて不思議そうな顔をした。

「何、笑ってんだよ。気持ち悪いなあ」

そしてその疑問を口にする。手厳しい一言だ。

「んー？ 何でもない」

何でもない、と言いながらも、悠基は実に嬉しそうな表情を浮かべている。

もしも自分がどうでもいい存在であるならば、他の人たちと同じ対応しかされないだろう。悠基は、自分に厳しくしてくれる一彦が好きだ。そうしてもいいと彼に思われていることが堪らなく嬉しい。

「ありがと、ヒコ」

だから、思ったことは口にする。

「うん？ うん」

一彦は訳も分からずに頷くが、悠基が嬉しそうならばそれでいいか、と思っっているようだった。

喧騒の教室に、授業開始を告げるチャイムが響く。

「ほら、佐藤。授業始まるぞ、前向け」

右手で悠基の肩を軽く押しながら、一彦が言った。一彦の机に身体を預けたままだった悠基は、

「ええ、つまらないなあ」

と文句を言うが、大人しく問題集とシャープペンシルを手に自分

の机のほうへと向き直った。授業などどうでもいいが、一彦の邪魔をするのは気が引けた。

（そうだ、数学の宿題をやっていよう）

悠基が方向のズレた決意をした瞬間、教室前方の扉が開いた。そこから国語教師が姿を現すが、そんなことにはお構いなしだ。週番の合図に応え機械的に教師に挨拶をした後は、悠基は珍しく数学の問題集に没頭していた。途中で自分が握っているシャープペンシルが一彦のものであることに思い至ったが、悠基は気にしなかった。授業が終わったら文句を言われるだろうな、そう知りながらも、それも悪くないと思った。

誰もいない剣道場。騒がしい放課後の雰囲気、遠い場所での出来事のように感じられる。

左脇に抱えた竹刀袋をぎゅっと握り直すと、悠基はゆっくりとした足取りで剣道場の中へと歩を進めた。そして窓を開け放す。1日中締め切られていた空間は梅雨の時期独特の湿った空気に満ちていた。雨が降っていない梅雨晴れである分、今日はそれでも幾分かはマシなほうなのかもしれない。

すい、と入り込んでくる風が心地よい。何か清浄なものが肺を抜けて、身体を、思考を満たしていくかのような感覚。幾度か呼吸を繰り返すと、それだけで自分の中の汚いものが全て浄化されてしまったように思えた。

着替えよう、心を新たに、悠基は隣接する更衣室へと向かった。その背中を、軽い足音が追いかけてくる。

（誰だろう）

その音を耳にした悠基は途中で立ち止まった。経験からして、まだ他の部員が来るには早すぎる時間だ。振り向いて入り口のほうへと顔を向けると、姿を見せたのは一彦だった。決して来るはずがないと思っていた人物の登場に、悠基は目を丸くして言葉を失った。

「ああ、やっぱりここにいた」

道場内に立つ悠基の姿を認めて一彦が言った。その手には何も握られてはいない。

「……ヒコ？ 何しに来たの？」

悠基が素直に疑問を口にする、一彦は至って簡潔にその用件を口にした。

「先生から伝言」

「伝言？」

「次に掃除当番をサボったら校長室。以上」  
「げっ」

放課後の掃除当番。クラスごとに割り当てられた清掃箇所を、クラスメイトたちで週代わりに分担して清掃を行っているのである。今週は悠基は化学室の清掃当番になっていたのであった。

「いや、サボったんじゃないくて、覚えてたんだけど、」

「覚えていたのにやらなかったら、それはサボりなんだよ」

慌てて言い訳を考えるが、その言葉はあっさりと一彦の声で一刀両断にされてしまう。悠基は溜息を吐いた。

その溜息を了解の返事と受け取ったのか、

「それじゃ、確かに伝えたから」

一彦はあっさりと踵を返してその場所を後にしようとする。その背中を悠基の言葉が追いかけた。

「何だ、もう帰るのかよ」

「帰りはしないけど。俺だってこれから部活だから」

足を止め、身体ごと悠基のほうに向き直りながら一彦は言った。

その言葉に思う。早く部活に行きたいだろうに。ましてやあんな伝言、今日中に伝えなければならぬことでもない。先生に言われて律儀に探しに来たのだろうか。悠基は一彦のその行動に感心しながらも、同時に嬉しくもなってきた。自然と表情が緩むのを止められない。

そして思わず、言葉が口を突いて出た。

「せつかく此処まで来たんだから、久々に稽古していけば？」

悠基の言葉を聞いて、一彦は一瞬目を驚かせた。しかし、しばし逡巡した後、彼は静かに言った。

「……やめたからには、もうやらない」

「勿体無いなあ、強かったのに」

素直な気持ちで悠基の口から言葉になって発される。悠基は懸命に剣道の稽古をする一彦の真剣な目が好きだった。そして同時に一彦は悠基のよい好敵手でもあった。彼が強くなればなるほど、行きたい場所が見えるのだ。悠基が唯一真っ直ぐに取り組んできたもの。自信も実力もあったが、今に甘んじてはいけないのだと、教えてくれる存在であつたのだ。それなのに、彼は高校進学と共にあっさり剣道をやめてしまった。勿体無い。それが悠基の素直な気持ちだった。

しかし悠基の言葉を聞いて、一彦は困ったように表情を歪めた。

（ああ、傷つけてしまったな）

悠基はぼんやりと思った。

そういえば、あの日も彼は今と同じように表情を変えていたっけな。

曇り空の放課後。茶道部の稽古を終えた一彦と、同じ部活だという2人の女の子と交わした会話。自分が何を言ったのか、悠基は殆ど覚えていなかった。しかし小さく歪んだ一彦の表情は鮮明に思い出された。

悠基は時々、自分の行動、発言全てが一彦を傷つけているような気がして不安になった。痛々しいほど自身に厳しい彼に、自分が与えるものは何なのだろう。しかしそんな感情で臆病になりながらも何処かで彼に見放されるはずなどないと傲慢になっている自分がいるのも確かなのだった。

「……わかった、悪かったな」

一彦の顔から視線を逸らしながら悠基は言った。

彼を傷つけないために、自分に足りないものは、一体何なのだろう

う。

「いいよ、別に」

落ち着いた声で一彦は応えるが、悠基はどんな表情をすればいいのかわからなかった。

感情が、揺れる。振れる針は次は何処を示すだろうか。

黙ってしまった悠基の代わりに一彦が言葉を紡いだ。

「それじゃ、俺は行くから」

「……ああ、気をつけて」

武道館の入り口のほうへ顔をちらりと向けて、一彦は更に続けた。  
「実力で、黙らせるんだろ？」

突然言われたその言葉の意味が分からずに悠基は眉を顰めた。視線を一彦の顔へと戻すと、彼は真剣な表情で悠基を見ていた。その目に圧倒されて、悠基は理解もしてはいなくせに頷いてしまう。

「あ、ああ」

悠基の返事を待つて、一彦は踵を返した。

「またね、佐藤」

その口元が、何故だか笑っているような気がした。

道場に1人残された悠基はぼんやりとその場に立ち尽くしていた。あまりに短時間のうちに感情が動きすぎて、酷く疲れていた。

一彦の足音が遠ざかっていく。それと入れ替わるようにして、複  
数人の気配が近づいてきていた。大きな話し声が聞こえる。

「ったく、やってらんねえよな」

「ホントだよ」

その声が悠基の感情を刺激した。行く先を見失っていた感情の針が、再び動き出す。遠慮の欠片もない大きな声と足音が不愉快だった。

（黙れ、黙れ）

心の中で叫ぶ命令は切望にも似ていた。

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ。

足音も、会話の声も、徐々に近付いてきている。もうすぐだ。も

うすぐで入り口に彼らの姿が見える。

悠基はぎゅっと竹刀袋を握り締めた。

「いちねんせーのガキに、レギュラー取られてたまるかよなあ」

はつきりと聞こえたその言葉。

針が振り切れそうになる瞬間。

脳内に声が響いた。

（実力で、黙らせるんだろ？）

ゴトン。

悠基は竹刀袋を床に取り落とす。それと同時に煩わしい音の持ち主たちが姿を現した。彼らは学年が1つ上の部員たちであった。

「佐藤？ 何やってんだよ、お前。そんなところに突っ立って」

彼らは道場の中で1人立っている悠基を見て顔を顰めた。自分たちの会話が当人に聞かれていたとは露にも思っていないらしい。間の抜けた面だった。

その馬鹿面を見て思った。

（馬鹿馬鹿しい）

訪れた怒りを蹴り飛ばし、悠基は自嘲気味に笑みを浮かべた。彼らの抱くくだらない意地もプライドも、それをまともに相手しようとしていた自分自身も、実に馬鹿馬鹿しい。

悠基は床に転がった竹刀袋を拾い上げた。急速に姿を現した嵐は更なるスピードで通り過ぎていた。

（今日はもう、2度目だな）

実力で黙らせる。いつか自分で口にした言葉。それを借りた一彦の言葉に、救われたのかもしれない。彼はこうなることを予測していたのだろうか。

調子のいい軽い口調を取り戻し、悠基は言った。

「先輩、俺、別にインハイのレギュラーなんて興味ないんで。お好きにどうぞ」

先輩部員たちは悠基のその言葉を聞いて、ぎょっとしたように顔を見合わせた。実に滑稽だった。悠基は全ての荷物を手に道場の入



り口へと歩を進めた。彼らが身を固くするのが分かったが、そんなことはお構いなしだった。口元にだけ笑みを浮かべていた。

「でも、先輩たちじゃあ試合は勝ち進めませんね」

道場と廊下の境目、すれ違う瞬間に、悠基は低く呟いた。その言葉は当然彼らの耳にも届いていたのだろう。背後で何かを怒鳴る声がする。しかし彼ら自身が追いかけてくることはなかった。

悠基は何も聞こえないふりをして武道館を後にした。

（水を零したみたいだ）

歩道を歩きながら、悠基は空を眺めた。決して雲は多くはない。しかしその色は青と呼ぶには薄すぎる。真っ白な雲と区別がつかないほどにぼやけた空は、今の悠基の心情を映しているかのようだった。

過ぎ去った嵐は、それでも決して消えたわけではないのだろう。身体の内底でわだかまり、今になって再びその存在を主張してきていた。

悠基が剣道を始めたのは小学3年生の時だった。悠基は幼い頃から感情をコントロールするのが苦手で、喧嘩ばかりをしていた。売る喧嘩に買う喧嘩。精神を鍛えるためにと、両親は悠基を地域の剣道場へと通わせた。齟齬はあれども、強くなりたい、そう思っていた悠基は嬉々として道場に通った。もともと体力はあり、運動神経もよかった悠基はみるうちに実力を上げた。試合に勝てば嬉しい。負ければ、悔しい。けれども次は勝つのだという、熱意と楽しさのほうに勝った。夢中になった。

（あー、剣道、したいな）

内に潜む嵐も、このくすんだ感情も。道着に身を包み竹刀を握ればあつという間に忘れてしまうのに。

自分は何処へ向かっているのだろうか。そんなことを考えながらも足取りは無意識のうちに駅への道の上にある。ぼんやりと悠基は歩

き続けていた。すれ違う誰もの顔も意識に入らなかった。

「おい、佐藤、無視すんなよ」

だからその声があった時も、突然自分の横に存在が沸いて出たような気がして酷く驚いた。ざわざわと、心がどよめく。

「どうした？ お前が元気ないなんて珍しいな」

誰だろう。一瞬そんな疑問が脳裏に過ぎったが、よく見ると中学生時代のクラスメイトであった。ふっと懐かしさが湧いてくる。

「うつわ、久しぶりだな！」

自然と明るい声が出た。

「最後に会ったの卒業式だろ。懐かしいなあ」

相手の肩をバシバシと叩いて、少し大げさなほどに再会を喜ぶ。

特別に仲が良かったわけではないが、久々に会ったためか不思議な興奮が胸を満たしていた。淀んだ感情が一気に晴れたような気がした。

一通りの思い出話に花を咲かせた後、相手が言った。

「そつえば、お前今でも剣道続けてんの？」

その視線は悠基が抱えている竹刀袋に注がれている。同じように悠基も視線を遣って答えた。

「もちろん」

すると彼は何処か嘲笑うかのような表情を浮かべた。

「じゃあ鈴木も剣道続けてんだろ。金魚のフンみたいにお前と一緒にいたもんなあ」

その言葉に、一瞬にして悠基の感情の針は振り切れた。なんという束の間の静寂だろう。嵐の再来。今度は止める術など持っていない。

笑みを収め、目を見開いて、悠基はその右手の拳を相手の左頬へと叩き込んだ。彼は驚きと本能でそれを避けようとしたが、悠基の動きのほうが早かった。かつてのクラスメイトは歩道の上へと倒れ込み、抗議の声を上げた。

「何すんだよ、お前！」

しかし悠基はそれには答えない。竹刀も荷物も放り出し、左腕で彼の胸倉を掴んで引き上げて、更に殴った。拳が痛くて不愉快だったが、止められなかった。

しかしさすがに相手も無抵抗のままではない。悠基の腕を振り払い殴り掛かってくる。唇の端が切れて口内に血の味が広がった。自分が何に怒りを感じているのかなど今は考えられなかった。ただ腹が立って腹が立って仕方がなかった。殴っている相手が誰なのかですでに分からなくなっていた。昂ぶる感情を拳に込めて、ただただ目の前にあるものを殴りつけていた。

喧嘩を止めに入る通行人の声が遠くに聞こえていた。

どうやってあの場を後にしたのか、悠基は覚えていない。ただ警察の世話にはなっていないので、誰かが仲裁に入って場を丸く収めたか、それとも相手が逃げ出したかのどちらかではあるのだろう。

しかしそんなことはどうでもよかった。

叩きつけた怒りが、送り返された怒りが、痛かった。

制服は皺くちやで、砂と血で汚れていた。時折すれ違う通行人が奇異の目を向けてくるが悠基は気にならなかった。

（アイツには悪いことしたな……）

殴った瞬間の驚きと恐怖の表情が今になって思い出された。楽しそうに笑いながら話していたはずなのに、急に激昂したのだから仕方がない。しかしあんな奴は殴られても当然だという気持ちも強かった。

ごめん、ヒコ。悠基は思った。

実力で黙らせる、その言葉で先輩部員たちへの怒りは抑えられたけれども次は駄目だった。自分に対する言葉ならともなく、一彦への侮辱は耐えられなかった。

（金魚のフンのようについて回っていたのは、自分のほうだ）

生真面目でつまらない奴。それが中学1年生の春、始めて剣道場

で一彦に出会った時の印象だった。しかし付き合っていくうちに、それが今度は魅力に変わっていった。不真面目で常にふらふらと揺らいている悠基と、真面目で努力家な一彦。悠基は彼が何かに手を抜いている姿を見たことがなかった。それでいてその努力をひけらかさない。その姿勢が好きだった。

恐らく自分は彼からしたら嫌いなタイプの人間なのだろう。けれども彼は決して自分を遠ざけることをしなかった。それどころか、時々自分にだけは気を許してくれているようにさえ感じられた。そして知れば誰もが離れていく嵐を、臆することなくそばに置いてくれる唯一の。

（傷つけないのになあ）

直接的にであっても、間接的にであっても、一彦を傷つけるのだけは嫌だった。守りたいとか、そんな綺麗な感情ではない。ただ自分が嫌だという、それだけのことだった。

自分に足りないものは何だろう。

今日はなんだか、そんなことばかり考えているような気がする。彼に見放されてしまったら、自分はどうなってしまうだろう。

いつの間にか太陽が夕陽へと姿を変える時分になっていた。目的の駅は人の群れで溢れかえっているだろう。けれどもそのほうが却って自分の姿が目立たずに済むような気がした。

煌々と光を放つ夕陽が薄い雲の隙間から上手にその姿を覗かせている。ぽっかりと空に開いた落とし穴のようだった。

（空っぽになってしまえばいいのに、）

暴力的な怒りも、剣道への情熱も、誰かへの執着も、みんなみんな空っぽになってしまえばいいのに。そうすれば何かに期待することも自分に絶望することもないのに。

（けれども、それは自分じゃあない）

佐藤は毎日楽しそうで、いいな。

いつか、そう言って笑った一彦の声と笑顔が思い出された。

何が、いいのだろう。本当に自分は何かを楽しんでいるのだろう

か。彼は楽しくないのだろうか。けれどもそれが自分なら。自分でいいのなら。例えくだらないものであったとしても、それで心を満たしておいてもいいのかもしれない。

悠基は痛む拳をぎゅっと握り締めた。強くなろう。強くあろう。躓くことがあってもすぐに起き上がれるように。これ以上諦めを選択することのないように。

アスファルトに伸びた長い影。湿った風が悠基の髪を揺らして去っていく。心なしか西の雲が黒味を帯びてきたような気がした。今夜は雨になるのだろうか。

けれども悠基の嵐は過ぎ去った。今日はもう訪れることはないだろう。

太陽の光が世界を照らしている。影は必ず何処かにできるけれど、その時はまた別の角度から光を当てればいい。

切れた唇から滲んだ血を手の甲で拭って、悠基は歩調を速めた。歩き続けた。

角度の変わった教室。昼休み。担任の気まぐれで決行された席替えは、ほんのわずかな期待と落胆を残してあつという間に過去の出来事へと変わっていった。数時間もすればすぐに新しい視界にも黒板との距離にも慣れてしまふのだろうか。

廊下側1番端の列、その1番後ろの席に座った悠基は猫背になつて無心で紙を折っていた。

窓から遠く離れた指定席。今日は生憎の雨模様で教室は締め切られたまま。蒸し暑さが肌に纏わりついて不快だった。空は無彩色の雲で覆われており、蛍光灯の灯りが教室を妙に明るく照らし出している。快晴の青空には程遠い世界。重く淀んだものになりがちな空気を切り裂く何かがあればいいのに、そう思った。

上半身を起こした悠基の手には白い紙ヒコーキが握られている。窓の外へと身体を向けた。

灰色の雲、降りしきる雨、鳥すら飛ばない広い空。届かない場所へと手を伸ばすのは、愚かなことなのだろうか。

悠基は右手を上げて、前方へ押し出すようにして指を離した。ざわざわと騒がしい昼休みの教室の中、すい、と綺麗な弧を描いて、紙ヒコーキが飛んだ。

紙ヒコーキは窓際の席で熱心に本を読んでいた一彦のほうへと飛んで行き、彼の机の上に着地した。それはプリントか何かで作られた、いびつな形の紙ヒコーキであった。彼は紙ヒコーキの存在に気がつく、それを手に首をかしげた。

紙ヒコーキがそこまで綺麗に飛ぶとは思っていなかった悠基は、驚きながらも純粋な喜びを感じて席を立った。そして言葉を口にした。ながら一彦の席へと近付いていった。

「まさかヒコのほうまで飛んでくとはなあ。悪い、悪い」

「何だ、佐藤か」

飛んできた紙ヒコーキの原因に気付いた一彦が顔を上げた。

「俺の席から投げたんだぜ？ 俺、紙ヒコーキ職人になれるかも」  
座る一彦のすぐ横に立った悠基はそう言って得意げに笑う。

「へえ。紙ヒコーキってそんなに飛ぶんだ」

感心しながら、一彦はその紙ヒコーキをしげしげと眺めた。どうやって作ったのか、それを確認するかのように一彦が紙ヒコーキを解体し始める。すると、

「あ、ちょ、広げんなよ」

悠基が非難の声を上げた。そして紙ヒコーキを持つ一彦の手を押さえつける。

「何で？」

「それ、さっき返された化学の小テストの解答用紙なんだよ」

「ああ」

ばつが悪そうな悠基の声。恐らく、あまり目にしたくない点数がそこには記載されているのだろう。それに納得した一彦が解体しかけた紙ヒコーキを元に戻した。そして悠基の顔に視線を送って言う。

「誰かと喧嘩するのもいいけど、少しは勉強したほうがいいんじゃないの」

「はっ、余計なお世話だよ」

悠基は一彦の言葉を傲岸な態度で切り捨てる。彼の頬と口元には湿布が貼られており、覆い損ねた痣が痛々しくその姿を見せていた。転んでできた痣でないことは一目瞭然である。しかし一彦は決して詳細を尋ねようとはしなかった。それが悠基には有難かった。朝から何度も何度も教員や友人たちに説明を求められてうんざりとしていた。

「それにしても、高校1年生にもなって紙ヒコーキとは」

「悪かったな、ガキだよ」

呆れたように一彦は言うが、悠基のその拗ねた口調に思わず笑みを漏らした。馬鹿にしているように見えるかもしれないが、それでも一彦は悠基とのやり取りを楽しんでいた。そしてそれは悠基にとっても同じであった。そのことがお互いに分かるからこそ、こうして笑っていられるのかもしれない。

「それ、茶道の本？」

一彦がそれまで読んでいた本を指差して、悠基は尋ねた。開かれたそのページには、説明書きと共に茶道具を扱う和装の男性の写真が掲載されていた。

「そ。今日稽古があるから、その予習」

言いながら、一彦は手にしていた紙ヒコーキを机の上に置き、再び視線を手元の本へと落とした。

「ふーん」

その様子を悠基は眺める。

かつて佐藤と共に同じ中学校の同じ剣道部に所属していた一彦は、高校に進学すると同時に茶道部に入部した。部紹介の際にその点前を見て、茶道に興味を抱いたのだという。

はらり、と、ページを捲る細い指。

剣道をしていたためか一彦はもともと姿勢はよかった。しかし茶

道を始めてからは指の動きや物の扱い、その動作さえも洗練されてきたように思える。立ち居振る舞い、というやつだろうか。

「茶道部、楽しい？」

悠基は尋ねる。それは前にも1度答えを求めたことのある問いだった。ここに来てもう1度、一彦の気持ちを確かめたくなったのだ。一彦は本から顔を上げることもなく、

「楽しいよ」

と一言で答えた。彼は本を読んでいる時など、何かに没頭している時は周囲への注意が散漫になる。現在所属している部活が楽しいかなど、わざわざ聞かずともその様子を見れば明らかだった。

悠基は少しだけ寂しくなって、目を細めた。

「……剣道部やめて、俺も茶道部入ろっかな」  
すい、と。

綺麗な弧を描いて飛んだ紙ヒコーキ。緩やかに上昇しながら、それでもいつかは下降して、その軌跡さえなかったことになっていく。こうして一彦という時に抱く感情も、いつかは同じように消えていくのだろうか。

「うん？ 何で」

その前に、

「俺、お前のこと好きだもん」

より高いところへ向かおうとすることは、許されるのだろうか。

「ふーん……」

素っ気無い、気の抜けた返事。一彦の視線は相変わらず本へと注がれていて、綺麗な指がページを捲る。

ああ。知っている。彼は本を読んでいると、条件反射で返事をすることはあっても、意識は全て本の内容へと注がれていて、伝えられた言葉の意味など考えてもいないのだ。

それを知っていて、伝えた言葉だ。

（これでいい）

殴り合いの喧嘩すら恐れない自分が、一彦に関しては臆病なこと



だ。それでいて、冗談だと言って逃げる狡さもあるのだからたちが悪い。それに剣道部をやめるつもりもさらさらなかった。

悠基は自分自身に苦笑した。

次の瞬間。

がばつと一彦が本から顔を離した。

「悪い、佐藤、本に熱中してた。何か言ったか？」

「いや、何も言ってねえよ」

昼休みの喧騒。雨音。呟かれた言葉を知っているのは、自分だけ。

「そうか？ それならいいけど」

そう言つて、一彦は読んでいた本をパタリと閉じた。キリのいいところまで読み終えたのだろう。そして伸びをして、固まっていた肩を解す。

「そうだ、明日剣道部休みだろ？ 俺の買い物に付き合わない？」

「どこ行くんだよ」

「隣の駅前に茶道具屋があつてさ。懐紙を買いたいんだ」

「……何のこつちゃ分かんねえけど、付き合うわ」

懐紙っていうのはな、と、一彦が説明してくれる。本当に茶道が楽しくて仕方がないらしい。

中学生の時はお互いに剣道に熱くなつていて、一彦は今、茶道に夢中になっている。悠基は相変わらず剣道に熱中している。その対象が変わったことで、悠基と一彦の関係も何かが変わるのかもしれない。それでも途切れることなく、続いていけばいい。

キンコーン……。

残り5分で昼休みが終わることを告げるチャイムが教室中に鳴り響く。

「あ、もう昼休みも終わるか。読書の邪魔して悪かつたな」

「いや、別にいいよ」

「じゃ、またな。あーあ、午後の授業めんどくせえなあ」

ブツブツと呟きながら、悠基は一彦の席から遠ざかる。思考はす

でに、午後の授業を通り越して放課後の部活へと向かっている。

（今のうちに飲み物でも買っておくかな）

教室を出て自動販売機へと向かおうとした悠基の背中を、

「佐藤！」

一彦の大きな声が追いかけた。悠基が声のしたほうへと振り向くと、

「忘れ物！」

笑いながら、一彦が窓際の席から解答用紙製の紙ヒコーキを飛ばした。紙ヒコーキは綺麗な弧を描きながら、すい、と、悠基の足元に着地した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5017p/>

---

2 . 敬

2010年12月14日21時25分発行